

「半亡命期」のトーマス・マンと「亡命宣言」-エーリカ・マンと父親トーマス(1)-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 久男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8107

「半亡命期」のトーマス・マンと「亡命宣言」

——エーリカ・マンと父親トーマス(1)——

田村久男

1936年2月3日付の「新チューリッヒ新聞」(Neue Züricher Zeitung)紙上に公開書簡の形で掲載されたコローディに宛てた手紙¹⁾の中で、トーマス・マンは初めて公に自らの反ナチスドイツの立場を明らかにする。

コローディは、「現代ドイツ文学はすべて亡命した」とするシュヴァルツシルトのテーゼに対し、逆に、「亡命文学」はユダヤ人たちの文学であり、亡命者達の中には真の詩人は皆無である、亡命したのは「小説産業」(Roman-Industrie)なのであると、亡命作家達の作品の質に疑問を呈する論評を新聞に載せていた。このコローディのシュヴァルツシルトに対する反論を、さらにマンの側から批判したのがこの公開書簡であった。マンは、両者の主張はともに事実誤認であるとしながらも、この中で「亡命文学」を擁護し当時のナチスドイツ政府を批判することで、自らをはっきりと亡命文学者の側に位置づけるのである。

この宣言が直接の引き金となり、十カ月後の12月2日に正式にドイツ国籍を失い、続く19日、1919年来授与されていたボン大学哲学部の名誉博士号も剥奪される。このボン大学の名誉博士号剥奪に際し、当時ボン大学の哲学部長であったカール・ユストゥス・オーベナウアーとの間で交わされた往復書簡の中で、「自分は殉教者たるよりも、はるかに代表者たるべく生まれつついている」²⁾というたびたび引用される有名な言い回しが用いられるが、これよりトーマス・マンは反ナチズムの旗印を鮮明にして、政治的な発言を通してドイツのヒトラー政権に対して闘いを挑むことになるのである。

しかし、1933年2月のミュンヘンでのヴァーグナー講演を最後にドイツを去ってからここに至るまでの3年間は、事実上の亡命生活にはあったというもののトーマス・マンの政治的な立場は極めて曖昧であった。マン自身も、自作『ヨーゼフとその兄弟たち』の執筆に専念するかたわら、専らヴァーグナーなどの文学的な講演や自作の朗読会を行うのみであり、このいっこうに自らの立場を明確にしようとしないうトーマス・マンに対して、彼の周囲は苛立ちを感じ、そのため特に身内であった兄のハインリッヒやわが子エーリカやクラウスとの間には距離が生まれることになった。

本論は、トーマス・マンがドイツを立ち去ってから3年間の「半亡命期」を経て上の「宣言」に至るまでの経過を、主として娘エーリカの果たした役割に注目し、彼女が父親の「決意」に与えた大きな影響を見ていきたい。

『ヨーゼフ』の救出

トーマス・マンの亡命直後、娘エーリカが父親のために果たした最大の貢献のひとつに『ヨーゼフ』原稿の救出があげられる。このエピソードはほとんど「伝説」にまでなっている。

当時、長編小説『ヨーゼフとその兄弟たち』を執筆中であったトーマス・マンは、ヒトラーが首相に選ばれた10日後の1933年2月10日、ミュンヘン・ゲーテ協会の主催で『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』と題する講演をミュンヘン大学の大講堂で行った。その翌日、友人に宛て「4週間後の再会を楽しみに」³⁾という手紙を書いて、このヴァーグナー講演をオランダ、ベルギー、フランスで行うために予定通り講演旅行に旅立つ。パリでの講演を済まし、静養のため滞在していたアローザで、2月27日、国会議事堂炎上の知らせが届き、とりあえず帰国を延期する。これがこの後十年以上にわたるトーマス・マンの亡命生活の始まりとなるのである。

女優であった長女エーリカは、俳優グスターフ・グリェントゲンスとの結

婚を解消した後（1929年）、この当時、音楽家のマグヌス・ヘニングス、女優テレゼ・ギーゼらとともに政治的な「文学」カバレット「胡椒挽き」（プファッフェンミューレ）一座を組織し、自ら台本を書きナチスを風刺する芝居を舞台にのせていた。この年1月のミュンヘンの「ボンボニーレ」での旗揚げの大成功に続いて、2月の公演も成功裏に終了し、28日、弟クラウスとともに4月に予定されていた第3回プログラムを準備するため、休養を兼ねてスイスのレンツェルハイデにスキーに出かけた。そこで国会議事堂の放火事件を知り⁴⁾、3月に入ってから密かに二人はミュンヘンの町に戻るのである。

弟クラウスとともにミュンヘンの自宅に入ったエーリカは、スイスのアローザにいる父親に電話をかけて、身に危険があるという理由でドイツへの帰国を思いとどませよう説得するが、ゲシュタポの盗聴を恐れて「悪天候」と伝える。後年、彼女がアメリカに移住したのちインタビューに答えて、この緊迫した場面を次のように語っている。

[...]

聞き手：「それであなた方のご両親は？ ご両親は当時ミュンヘンにいらっしやったのですか？」

エーリカ（聞き手に非難の目を向けて）：「当然あなたの方が私なんかよりよくご存じでしょうが、両親はその時たまたまスイスにいたのです。私たちは両親に電話をかけて、天気が良くないので今は戻らないほうがいいと言いました。両親は長いことわかろうともしませんでした。天気が悪いのはアローザも同じだ、などといって両親は帰国を延期しようとしませんでしたので、電話での話は長引きました。ここのひどい空気は堪え難いので私たちがこれからスイスに行くから、そこではっきり事情を説明するといったので、ようやく両親は納得したのです。」

聞き手：「あなたが1933年の3月12日のその日ミュンヘンをたち去ってから、もう二度とミュンヘンを見ることはなかったのですか。」

エーリカ：「いいえ、もう一度帰りました。ずっと後にもう一度ミュンヘンに行ったんです。」

聞き手：「面白半分にですか？」

エーリカ：「違うんです。父はフランスに行ったのはほんの何週間かの休暇のつもりでしたのでスイスに着いたときにも、イーザル川のわが家にヨーゼフ小説の原稿を残したままでした。この家は監視されていました。私たちがほんの些細なものでも財産から持ち出すことは禁止されていて、すべてナチのものだというわ

けです。しっかりと見張られているだけに、都合は良くありませんでした。この原稿だけはそのままにしておけなかったのです。」

聞き手：「あなたは取りに戻ったんですか？」

エーリカ：「私が戻りました。[...]」⁶⁾

この後、変装して自宅に忍び込み、父親の原稿を新聞紙にくるみ、ナチで溢れるミュンヘンの町を真夜中、愛車フォードで脱け出す様子がユーモアを混じえドラマチックに物語られる。この、自著の中に採録したインタビューでエーリカは、あたかも自分が二度ドイツに戻ったかのように報告している。一度目はクラウスとともに両親に電話で帰国を思いとどまらせ、その後再び単独で自宅に忍び込み原稿を持ち出したというのである。この二度目の帰国は4月のはじめの頃とされ、当時、マン一家に好意的であったバイエルン州首相ハインリッヒ・ヘルトはすでに解任されておりミュンヘンの町もナチスの影響下にあっただけに、この二度目の帰郷はエーリカの大胆さをしめすエピソードとして広く信じられており、ペーター・デ・メンデルスゾーンでさえも『魔術師——ドイツの作家トーマス・マンの生涯』の中では、エーリカのこの二度目の「無鉄砲な行為」を記述している⁶⁾。しかし、エーリカ・マンの伝記を書いたイルメラ・フォン・デア・リュエは、トーマス・マンの3月15日の日記にすでにこの原稿の記述があることから、この二度目の「大胆な行為」はすべてが脚色癖のあったエーリカ自身によってでっちあげられたフィクションであり「伝説」であるとする。「1933年3月12日に彼女は父親に電話をかけ、引き続きスイスに留まるように説得した。それから彼女は自分のトランクと『ヨーゼフ』の原稿を詰め込み、これを最後にドイツを立ち去ったのだ。」⁷⁾

いずれにせよ、利発な娘エーリカによって『ヨーゼフとその兄弟たち』の第三部にあたる原稿がいち早くトーマス・マンの手元に戻ったという事実は変わらない。この原稿は、ドイツを出国した時にはそれが亡命につながるとは夢にも思わなかったトーマス・マンが、ミュンヘンのギムナジウムに残してきた末の二人の子供エリーザベト、ミヒャエルと並んで是非ともドイツ

に戻らねばならないと考えた事情の一つであり、長女エーリカによって父親の気がかりの一つは取り除かれたのである。(末の二人の子供たちは、学業のためにまだドイツに残っていた次男ゴーロ・マンが四月のはじめにスイスに連れ出すことに成功する。)

これ以降、トーマス・マンは主にスイスの地において、再びヨーゼフ小説第三巻(後に『エジプトのヨーゼフ』と名付けられる)の執筆に専念することとなる。そして、これより後、この「半亡命」期にナチスドイツに対して自らの政治的立場を明確にしようと思わず、ひたすら自分の著作のみを気にする父親と、この父親の優柔不断とも見える態度に業を煮やした上の子供エーリカ、クラウスの間での確執が表面化した際、まさにこのヨーゼフ小説も、出版先をめぐって親子の間の対立に巻き込まれるのである。

フィッシャーとクウェリードー

姉とともにドイツを去ったクラウス・マンは、スイスの大富豪の娘でありエーリカとも極めて親しい関係にあった女友達アンネマリー・シュヴァルツェンバッハの資金援助を受け、雑誌『集合』(die Sammlung)の発刊を計画する。この雑誌はナチスドイツから亡命した文学者達の拠り所となるべく期待され、第1号は1933年秋、フリッツ・ランツホフが編集するアムステルダムのクウェリードー書店から出ることになる。

クウェリードー書店の経営者だったポルトガル系ユダヤ人エマヌエル・クウェリードーは、後にドイツ軍のオランダ進入により妻とともに強制収容所で死亡するが、この当時、ドイツから亡命してくる作家達のためにドイツ語の出版部門を増設しようと考え、折しも作家達の相次ぐ亡命により危機に瀕したベルリンのグスターフ・キーペンホイアー書店の編集者ランツホフの協力を得て、ドイツ人亡命作家達を集めていたのである。

アラート・デ・ランゲ書店とともにアムステルダムの亡命作家達の出版に

重要な役割を果たすことになるこのクウェリード書店は、1933年の秋、ハインリッヒ・マンのエッセイ集『憎悪』、エルンスト・トラーの『ドイツの青春』、リオン・フォイヒトヴァンガーの『オッペンハイム姉妹』を皮切りにドイツ人作家達の著作を出版してゆくが、当然のことながらランツホフの最大の関心は、ノーベル賞作家であり世界的な名声を獲得していたトーマス・マンに向けられたのである。彼は、今やパートナーとなったクラウスを通して、父親トーマス・マンが亡命を機に S. フィッシャー書店から離れ『ヨーゼフとその兄弟たち』をクウェリード社から出版するよう期待した。そしてこのクラウスの試みに、ほぼ同じ時期にミュンヘンから亡命してきたテレゼ・ギーゼ、マグヌス・ヘニングスらとともにチューリッヒでカバレット「胡椒挽き」の再開を準備する姉のエーリカも全面的に協力したのである⁸⁾。彼女は、父親の書店であった S. フィッシャー社がナチス政権下のドイツを離れようとしないうちに反感を抱いており、この年6月4日の父親宛の手紙の中で、クラウスのために、知り合ったばかりのランツホフを推薦する。

ランツホフのことは K. からも聞いたと思いますが、彼は今アムステルダムの子版社の仕事を任されていて、たとえほんのわずかでも T. M. のゼップル (= 父親トーマス・マンの『ヨーゼフ』) の出版が引き受けられるという感触をもてば、すぐにでも彼は汽車に飛び乗るでしょう。

私の方からも再びこんなことを言い出すのは、あなたがナチ同調者のフィッシャーと今すぐにでも手を切り、ホーエンツォレルンの墓穴ベルリンや言論統制をやっているヒトラーとは何の関わり合いも持ってほしくないと切望しているからなのです。——あのズーアカンプときたら全く抜け目のない男です⁹⁾。

クウェリード書店から1933年9月に出た雑誌『集合』は、H. マン、J. ヴァッサーマン、A. デーブリーン、J. ロートらの亡命者達の寄稿を得るが、その結果、クラウスの当初の意図とははずれ、反ナチス批判の政治的、闘争的色彩を濃くした。そして、クラウスはその寄稿予定者の中に本人の明確な同意をえぬまま父トーマス・マンの名前を載せてしまったことで良心のどがめに苦しんでいた。直接父親に話をもち出すことのできない気弱な弟に代わ

り、姉のエーリカは発刊の直前になってやっと、父親から電報で了解を貰ってやっている¹⁰⁾。

一方、S. フィッシャー書店の方は、これまで一部の例外を除いてトーマス・マンのほとんどの作品を出版しており、マンも専らフィッシャーの文芸雑誌『新展望』(Die Neue Rundschau)を自分の作品の発表の場としていた。何と云っても、創業者ザームエル・フィッシャーは、トーマス・マンがまだ新進の作家であった時期に、彼の作品にいち早く注目し、処女短編集『小男フリーデマン氏』(1898年)を出すとともに、まだ短編小説しか書いたことのなかった彼に長編小説を依頼し、そしてこの作品『ブッデンブローク』(1901年)の成功によってマンの作家としての名声は確立した。マンの言葉に従えば、その当時文芸専門店として独立して間もない出版社S. フィッシャーにとってはまさにこれは「冒険」であり、マン自身恩義を感じていたし、フィッシャー夫妻と個人的に親しいつき合いもあった。この当時、創業者のザームエル・フィッシャーはまだ生きてはいたが、実際の経営は彼の女婿ゴットフリート・ベルマン＝フィッシャーに引き継がれていた。トーマス・マンとベルマン＝フィッシャーの関係は、創業者ザームエルほど親密ではなかったとはいえ、彼がドイツを出た当時、『ヨーゼフとその兄弟たち』の第一巻、第二巻(のち『ヤーコプ物語』『若きヨーゼフ』と名付けられる)の原稿はすでにS. フィッシャー書店で印刷にまわされ、第三巻の完成を待っていた。しかし、反ユダヤ主義を公言するナチス政権下のドイツで、果たしてこの旧約聖書のユダヤ人の族長を扱った作品がドイツに受け入れられるのか、ベルマン＝フィッシャーの側にも心配はあったのである。

新たにクラウスがクウェリドーから出す雑誌『集合』は、「フィッシャーの作家」達の相次ぐ亡命による経営の危機を恐れるベルマン＝フィッシャーにとっては自社の文芸雑誌『新展望』に対する挑戦と映った。『ヨーゼフ』のドイツでの出版に際し国内のボイコットを恐れるベルマン＝フィッシャーは、講演旅行に出かけたままスイスに留まり帰ろうとしないトーマス・マン

に手紙を送り、再三にわたりこの息子クラウスと、スイスで「胡椒挽き」によって公然とナチス政権の批判を再開したエーリカとは距離を置くようにと訴える一方、義理の母ヘートヴィヒ・フィッシャーなどマンの身近な人間を介し、たびたび彼にドイツに帰るよう説得すると同時に、1933年夏には、自ら帰国を促す手紙をしたためている。そして、ベルマンのこの帰国要請の背後にはゲッベルスの希望と了解があったともいわれている¹¹⁾。

あくまでも自分の作品がドイツ国内で読まれることを望むマンの側でも、帰国にこそ同意はしなかったが、このベルマンの忠告をいれて、左翼的な傾向をもち共産党にも近いと思われていた兄ハインリッヒやクラウス、エーリカとは表向きには距離をとるに至るのである。その結果、一度は同意したマンもクラウスの雑誌『集合』への協力を公式に撤回することになる¹²⁾。また『ヨーゼフとその兄弟たち』の第一巻『ヤーコブ物語』は、エーリカからの期待にも関わらず、結局1933年秋にベルリンのS. フィッシャー書店から出版される¹³⁾。しかしエーリカはその後もたびたびクウェリードー書店のランツホフのために口添えをしている。

ランツホフは私に、自分もクウェリードーももうじっとしてはいられない、エッセイ集とヨーゼフの第三巻、その他、とりあえず出版できるものは何でもいからオファーを取りたいし、そうしなければならないと書いてきました。[...] 私はあなたを例えば「説き伏せる」とか——もちろん政治のことなどもそうですが——出しゃばって口を挟むつもりなんかは全然ありませんし、また、クウェリードーに決めてくれとあなたに頼むつもりもありません。でも、もしあなたが一言彼を支持すると言ってくたさるならば、それは、私たちにはどれほど重要なことであり、にもかかわらず、あなたにとっては些細なことであるかを考えていただきたいのです。そのことをお伝えしたいと思ったのです¹⁴⁾。

この手紙の中で触れられているエッセイ集『巨匠達の苦悩と偉大』のほうも、この手紙が書かれた翌年の春S. フィッシャー書店から出版される。結局このエッセイ集が終戦までドイツで出版された最後のマンの著作となるが、ベルマン＝フィッシャーとはマンは最後まで離れることはなかった。エーリカは、父親から献辞つきでこの本を贈られ、それに答える彼女の手紙は、

愛する Z. (=Zauberer, 姉弟は父親を「魔術師」と呼び、マンも子供達への手紙にはこう署名していた)

頂いた『苦悩と偉大』には、出版社のラベルだけは憎らしいとは思いますが、とても喜んでいます。もっともこの献詩の文言はもっと華やかであってもいいように思いましたけれども、正直感謝しています。

で始まり、「どんなに褒めても足りないくらいほんとに特別にすばらしい本です」(Zum Überfluß ist es einfach ein ganz besonders schönes Buch), どの作品も「ものすごくおもしろい」(Riesenspaß)¹⁵⁾と手放して褒めている。フォン・デア・リュエが「エーリカの感謝には皮肉な調子はない。彼女は根にもつことはなかったし、過ぎたことでよくよ思い悩むこともなかった」¹⁶⁾というようにこの手紙には、たとえ事が自分の思い通りに行かなくとも、それを後に引かないエーリカ・マンの性格がよく現れている。

クラウスの雑誌「集合」は、最後まで父親の協力が得られぬまま、競合する亡命雑誌があちこちで誕生したこともあって、二年後に廃刊となる。

「宣言」まで

ドイツから動こうとしないベルマン=フィッシャーはフランスの亡命ドイツ人新聞「パリ日刊新聞」(Pariser Tageblatt)でこれまでもたびたび批判されていたが、1936年1月11日、同じくパリの亡命新聞「新時評」(Das Neue Tage-Buch)紙は、このころになってようやく国外に亡命先を移すことを考えていた S. フィッシャー書店¹⁷⁾を誹謗する記事を書いた。この記事を書いたのはトーマス・マンも高く買っていた政治評論家レーオポルト・シュヴァルツシルトであった。シュヴァルツシルトは今回のフィッシャー書店移転計画の裏に疑惑を感じ、悪意を込めた論調で、フィッシャー書店の国外移転の試みが、亡命者たちの動向を探るため「ゲッベルスの了解と援助を得て、TM (=T. マン) を看板にウィーンに『偽装出版社』を設立」しようというもので、ベルマン=フィッシャーは「国家社会主義御用書店のお抱えユ

「ダヤ人」であると断じていたのである。

書店の移転交渉のためにロンドンに滞在していたベルマン＝フィッシャーはこの記事を知るや、14日、アローザで保養中であったトーマス・マンのもとに電話をかけ、弁護を依頼する。このベルマン自身の要請に応じてマン自身が起草し、ほかの二人のフィッシャーの作家ヘルマン・ヘッセ、アネット・コルプとの連名で、このシュヴァルツシルトの記事に対する『抗議』文が18日の「新チューリッヒ新聞」に掲載される。この中でマンは、「苦しい状況の下で創始者の精神を守り通そうとする」ベルマン＝フィッシャーの努力をたたえ「将来にわたって彼の仕事を信頼する」と宣言するとともに、「新時評」誌の中傷記事は「全く当を得ないもの」¹⁹⁾であるとS.フィッシャー書店を弁護する。

このトーマス・マンのベルマン＝フィッシャーを擁護する文章は、長女エーリカに大きな衝撃をあたえた。これまでS.フィッシャー書店と縁を切りクラウドスのクウェーリードー書店に着くように求めてきていただけに、しかも、ナチスドイツに対して公にはっきりと反対の態度を表明するように期待していたにもかかわらず、初めて出された声明が亡命者の側にいるシュヴァルツシルトに向けられていただけになおさらであった²⁰⁾。翌日、次のような書き出しで激しい怒りと失望を込めた手紙を父に宛てて書く。

愛するZ.

あなたがN.Z.Z. (=「新チューリッヒ新聞」)にお載せになった『抗議』は、たとえあのように書かざるを得なかったにしても、私には残念でショッキング(traurig und schrecklich)だったことは、当然よくおわかりのことでしょう。私があなたを「非難」したり、あなたのことに「介入」したりする権利などないことは、よく承知しているつもりです。とにかくこれだけははっきりと言っておきますが、なぜにあなたのやり方がこれほどまでに私には残念でショッキングに思われるのでしょうか。近い将来あなたにお目にかかることは難しいでしょう²¹⁾。

この手紙の中で彼女は、シュヴァルツシルトのS.フィッシャー書店に対する記事には確かに非難すべきところがあることを認めながらも、彼の「些細な誤り」に対し敢えて公式の抗議文を新聞に発表した父親を厳しくとがめ

る。父親はこれまで強制収容所にいるカール・フォン・オシエツキーにノーベル平和賞を与えるようオスロに推薦状を書いたときにもそのアピールは公表しなかったし、また当時親ナチ化していたノルウェーの作家クヌート・ハムスンがオシエツキーの推薦に対し不満を公にしたときにも、マンは沈黙をまもった。また兄ハインリッヒの『アンリ四世』（1935年、クウェリードー書店）が「新チューリッヒ新聞」でけなされたときにも、私的な手紙だけで満足していた。それにもかかわらず、こともあろうに、これまで立派な仕事を残して、マン自身彼の仕事を高くかっている亡命者シュヴァルツシルトにだけ抗議声明を公表するのは理解できないと言う。

今回の結論は、これがベルマン博士へのあなたの口からでた最初の「賛成」の言葉であり、第三帝国ができてから、あなたの最初の「反対」声明、あなたが初めて公にした『抗議』が、シュヴァルツシルトと「新時評」誌に向けられたということです（しかもこともあろうに N.Z.Z. 紙上で）。

シュヴァルツシルトと私のつき合いはほとんどゼロです。ベルマンに対しても個人的な敵意を抱いているわけではありません。私がベルマンに憎しみをもつのは、彼が果たしている役割のためなのです。ベルマン自身は哀れな程ちっぽけな人間です。しかし彼の影響が重大なのです。[...]

今回の『抗議』が再び明らかにしたことは（一度目は『集合』の「創刊号」がきっかけでした）あなたが今や亡命者全員と彼らの今までの努力を裏切り、背後から攻撃を仕掛けたということです。他にどんな言い方ができるでしょうか²²⁾。

最後に彼女は「私には残念でショッキングでなりません」という言葉を繰り返してこの手紙を締めくくる。フォン・デア・リュエがいうようにこの手紙でエーリカは父親に対する「長年鬱積していた怒りを爆発させた」²³⁾のである。

母親カーチャが娘の怒りを宥め、何とか二人を和解させようと手紙による仲裁を試みるが、エーリカはこれに応じようとしない。ついに、マンは23日「エーリカ宛てに十二枚の長い手紙を書き上げ、彼女と後の世のため」²⁴⁾に弁明を試みる。

愛するエリ、

おまえの手紙は当然ながら私には辛いものだったが、はっきりわからないままに不本意にも私がおまえに与えてしまった苦痛の当然の報いかもしれない。今でも

私は、今回の私の態度、私自身に定められた始まりと必然的な帰結に従った態度を、それがたとえおまえの生き方とは違っていても、認めてくれると思ってる。[...]²⁵⁾

この中でマンは、S. フィッシャー書店が今に至るまでドイツを捨てる決意をしなかったのは「不幸」であるとしながらも、プロッホ、グンベルトを例にあげ、厳しい法規制のもと国家権力と闘いながらも「精神の尊厳」のため、最近までユダヤ人作家の本を出版しつづけてきたベルマン＝フィッシャーの努力を認め、フィッシャー書店の今回の海外移転の計画の裏にシュヴァルツシルトがというようなゲッベルスの了解を得たスパイ的意図があり、第三帝国の代理店として国外に派遣されるという主張は、全く根拠のない馬鹿げた話であると、あらためてS. フィッシャー書店を弁護する。そして、今回シュヴァルツシルトに対して自分がこの抗議文を書かざるを得なかったのは「彼のベルマンに向けられた記事が卑劣なもの」で「弁護することも答えることもできない人間に対し、あのような方法を採用するのは、全くナチ流だ」ったからだとする。その一方で、エーリカの怒りについては、自分のこととして理解をしめす。

おまえは私と縁を切るというが、二つのことを言っておきたい。私のおまえに対する感情は絶縁などということ認めることはできないのだ。私がおまえたちを前に朗読するたびに、おまえが笑ったり目に涙を浮かべたりしたのを思うと、今回のこのおまえの絶縁通告は、今でも信じられない気がする。おまえはあまりに私の子でありすぎるから、たとえ私に腹を立てたとしても、そんなことが本当にあるなどということは考えられない。私がおまえの「胡椒挽き」一座の公演を見るたびにいつも心を動かされるのは、その大部分は、すべて私自身の存在のわが子による延長なのだという、父親の感情によるのだ。確かに私自身がそこで演じているわけではないし、そんなことをするのは私には似合わない。しかし、おまえがやっていることも私から出ていることなのである。結局おまえの私に対する怒りも、子供の形を取った私自身の怒りなのだ。おまえの怒りは、いわば私自身の良心の迷いの反映なのだ²⁶⁾。

そして、自分自身の果たすべき役割は、兄のハインリッヒやシュヴァルツシルト、フォイヒトヴァンガーらとは違い「控える」ことにあると述べる。

私のことでは忍耐が必要なのだ。私自身も我慢しなければならない。私の本来の

行動倫理はいつでも忍耐にあった。いつか私が自分で、完成などということを考えずに、世界とドイツに向かってはっきりとこう言う日がきっとやってくると思う、「もうたくさんだ、終わりにしろ、ならず者は去れ」と。おそらくこれは早すぎてもいけないことだったのだ——特に、自らの体験によって十分成熟し、自発的に自らそれを求めなければならないドイツ人たちのために考えれば。この忌まわしい事態に立ち向かうように世界に呼びかけたとしても、彼ら自身が心の奥底からそれを終わりにしてしまわなければ何にもならないのだ。そしてもし私がすっかり間違っているというのでないならば、その日がやって来るのはそれ程遠くはないであろう²⁷⁾。

そして最後に、『ヨーゼフ』が順調にいったおり、自分はその校正と最終巻の執筆に専念したいことを伝え、自分同様、エーリカにも保養の必要を説いて締めくくる。

この時期の政治的な感覚が、父親よりも、娘の方がはるかに確かで現実的であったことは、その後の歴史が証明する。

これに答えるエーリカの26日付の手紙では、父親の考えが間違っていること、すでに時代は、どちらの側にもつかずにいることは許されないのだということが訴えられる。彼女はこの手紙の中でまず、クウェリード一書店に移ったエミール・ルートヴィッヒに比べ「アネットリィやヘッシィ」²⁸⁾、シュテファン・ツヴァイクとともに大出版社フィッシャーにこだわる父親の態度は二重に愚かなもの (kotelettbrötchenhaft) であると批判する。父の作品は翻訳でも世界で広く読まれているのに、国外にありながらあくまで自分の本がドイツで読まれることを望み、フィッシャーにこだわる父の姿勢を「二股」(Zwei-Stühle-System) と難ずる。そして今回の父親の「決定」がもたらした「大きな災いと大きな危険、影響の大きさ」について、

[...]それが亡命者の悲しい分裂を招いたことです。あなたの権威のもとで真の完全なる亡命者と、偽の半亡命者(あなたもその一人です)に分かれなければならないことになるのです。この分裂はあなたが引き起こしたのです²⁹⁾。

そして、父親がこれまでも、クラウスと自分に対して協力的でなく、「胡椒挽き」のチューリッヒ公演がスキャンダルに巻き込まれ「新チューリッヒ新聞」が自分たちに批判的であったとき³⁰⁾も、父親は「指一本動かしてく

れなかった」こと、その上この新聞の文芸欄の主筆コロデーと「公然と」つきあい続けていること、さらにクラウドの雑誌『集合』を裏切り、そしてこの裏切りにより「それまでのナチの『愚かな蛮行』よりも彼に手ひどい打撃を与え破滅させてしまった」ことを責める。この恨み言の後、「創作に専念したい」という父親の希望に対しては、

[...]みんながあなたに——要求ではありません——望み、期待し、待ちこがれていたのは、あなたの存在が（あなた自身とあなたの著作が）自分たちの側に——汚物のようなドイツを離れ、国外のドイツの側に——ついてくれることでした。だから、あなたがキュスナハトで黙って机に向かって座っていることなんかではなかったのです。

[...]自分の責任を考えてみて下さい。あなたが三年間隠棲生活を続けたあと初めてやった行為で、亡命者の間に僅かばかりあった連帯が打ち砕かれてしまったのはあなたのせいなのです。そして、我々が「国内」に対して見せてしまったこの状況を考えるのです。心からお願いします、——本当に心から E. より³¹⁾

と、再度激しい怒りをぶつける。

「胡椒挽き」一座のスイス巡回公演中のザンクト・ガレンで、エーリカが、この父宛の手紙を書いた前日、チューリッヒでは、三人のフィッシャーの作家の『抗議』に答えてシュヴァルツシルトが再び「新時評」紙に『トーマス・マンに答える』³²⁾と題する文を載せていた。この中で、シュヴァルツシルトは、今やドイツ文学はほとんど全てがドイツを捨て亡命した、と断じ、トーマス・マンに対しては早急にS. フィッシャー書店と手を切り、ドイツのナチス政権に対し公式に反対声明を出すよう促していた。

このトーマス・マンに向けられたシュヴァルツシルトの二番目の論説に彼が答えより先、翌日26日の「新チューリッヒ新聞」は早くも『亡命者に照らしたドイツ文学』と題する反駁文を掲載した。この文を書いたのは、このときまでトーマス・マンと極めて親しい関係にあったスイス人の文芸批評家エドアルト・コロデーで、彼は「新チューリッヒ新聞」文芸欄の主筆であった。そしてこの新聞の文芸欄は、エーリカの「胡椒挽き」のチューリッヒ公演にたいし、初めのうちは好意的であったものの、その後批判的な論評

を載せつづけ、エーリカ的一座はスキャンダルに巻き込まれ、その結果、チューリッヒでの公演は事実上禁止されることになったのである。上に引用したエーリカの手紙の中にもたびたび触れられているように、当然のことながら、彼女はこの「新チューリッヒ新聞」には反感を持っており、父親のコローディとのつき合いも快く思っていなかった。この、本来はトーマス・マンの側に立ち彼の援護射撃となるはずであったコローディの論文が、皮肉なことに彼の本来の意図とは逆に、初めに触れたトーマス・マンの「亡命宣言」をもたらし、急転直下、父と娘の確執にも終止符を打つことになるのである。

ここでコローディは、ドイツ文学は全て亡命してしまったとするシュヴァルツシルトの主張は「ばかげたこと」で、「ドイツ文学をユダヤ人作家の文学と同一視する」がゆえの「ゲッターの妄想」であるとする。そしてG. ハウプトマン、H. カロッサ、R. A. シュレーダー、M. メル、E. シュトラウス、E. ヴィーヘルト、F. G. ユンガー、E. ユンガー、R. フーフ、G. ル・フォールらまだドイツ国内に残っている作家の名前を挙げ、逆に、亡命したのは「小説産業」と「本当に小説が書けるわずかな作家たち」であって、亡命者の中に「詩人」は一人たりともいないと述べる。

同日のマンの日記には「コローディがN.Z.Z. 誌で全ドイツ文学が亡命したとするシュヴァルツシルトの馬鹿げた主張に反論」³³⁾とあることからアローザに滞在中のトーマス・マンも、このコローディの反駁文を読んだのは確かである。これにどう応えるべきかしばらく彼はためらっていたようだ³⁴⁾。しかし、姉エーリカとは対照的にこれまで「父親を傷つけような行動」を控えていた³⁵⁾クラウスとクウェリードー書店のランツホフは、コローディの主張が自分たちに向けられていることは明らかであったので、たまりかねてアムステルダムから父親に電報を打ち「コローディの忌まわしき記事にいついかなりとも応えんことを切に願う。これは我々にとってはまさに死活の問題です。クラウスとランツホフ」³⁶⁾と泣きつく。

コローディに対するマンの反論は、翌日キェスナハトに戻ってから、まず妻カーチャが下書きし、これにマン自身が手を加え、仕上げまでにはほぼ一週間かかっている。その間、再び父のもとに帰ったエーリカは父親と食事をしながら「この件で打ち合わせ」³⁷⁾をしている。また彼女は「胡椒挽き」一座の3度目のチェコスロヴァキア公演に向かう列車の中からも手紙で父を激励、助言している。

あなたの「返答」がすばらしいものになることを神々にお祈りしています。[...] それからあの老ラスカー＝シューラーのことに触れるのも忘れないでください。彼女はゲッターのユダヤ人ですけど、コローディー派も高く評価しています。もちろん「詩人」ですし、汚らしい小説産業とは何の関係ありません。あなたの味方 E. より³⁸⁾

そして、このコローディ宛ての公開書簡はタイプライターで清書され、マン自ら「新チューリッヒ新聞」の編集室に持ち込むが、これが冒頭で触れた『コローディ宛て公開書簡』である。これが発表された三日後、エーリカは公演中のプラハから「感謝、成功を祈る、祝福を祈る。子供 E.」と打電し、数日のち母親カーチャに宛てた手紙でもこのことに触れている。

なんといってもこのすばらしい郵便には感謝しています。どれほど魔術師の快挙に喜んでいるか、申し上げる必要はないでしょう。お父さんは立派にやり遂げましたし、文章も明瞭で申し分なです。お父さんの体調はどうですか。もう疲れもとれたでしょうか。今はオリンピックが開かれますから、たぶんドイツからは何の反応もないでしょう。たとえこのあと何か言ってくるにせよ——いつかはきっとそうなるはずですが、今回の選択は立派でしたし尊敬しています³⁹⁾。

実際エーリカの予想通り、十カ月後の1936年12月2日、第七次市民権剥奪者名簿にトーマス・マンの名前が載ることになり、彼は正式にドイツ国籍を失い、財産は没収されることになる。しかしエーリカがこの時「胡椒挽き」公演を行っていたチェコスロヴァキアから彼にはすでにこの年の8月に市民権が与えられていた。

以上これまで長々と、トーマス・マンが亡命を決意するに至るまでの過程を、娘エーリカとの手紙のやりとりからたどってきた。「三十歳の娘が世界

的文豪を脅迫した」とする小塩節氏の表現まさにその通りあてはまる。この三年間のトーマス・マンのためらいには「[...] 自著をドイツで出版し続けたいと願い、ヒトラーの力をそれほど強大無比とも思わず、[...] むしろ『亡命』の悲惨を予見していた。実は亡命はしたくなかった。六十歳近くになって、故郷を捨てることは思ってもいなかった。とくに言語に生きる作家に、亡命は死を意味したのだ」と小塩氏のいうように、ここに「マンのふつうの人間らしさ」⁴⁰⁾を見て取ることができる。そしてこのマンのためらいは、すでに作品が各国語に翻訳され世界的名声を獲得していたとはいえ、人一倍自分を「ドイツ的な」作家と考えていただけに理解もできる。そして、例えばマンの親しい友人であった指揮者のブルーノ・ヴァルターら「音楽家」たちが亡命先でも立派にやっていけたのとは対照的に、クラウス・マンの雑誌『集合』にも協力した表現主義の作家エルンスト・トラーが1939年5月亡命先のニューヨークで自ら命を絶ち、これと相前後してヨーゼフ・ロートがアルコール中毒のためパリで死んでいることから六十を越えた「ドイツ作家」マンの不安も実際に正しかったと言えるのかもしれない。プロイセン芸術アカデミーの会員を務め「ワイマル期」文学の大御所的な存在であり、映画『嘆きの天使』の世界的ヒットでその名を知られていた兄のハインリッヒ・マンでさえもが亡命中は決して恵まれた生活をしていたわけではなかったのである。だからこそエーリカは亡命者の側に父親の「権威」をひきつけたかったのかも知れない。

そして同じことは少し形を変えているとはいえ、エーリカの「胡椒挽き」一座の場合にもあてはまる。マンの「亡命宣言」の翌年、彼女はテレゼ・ギーゼら仲間達の反対を押し切り「胡椒挽き」のアメリカ公演を強行する。そして、1933年1月1日ミュンヘンでの初演の成功以来、公演回数は1000回を越え、スイスに移ってからも経済的に成功していた唯一の亡命カバレットであったこの「胡椒挽き」一座も⁴¹⁾、1937年ニューヨークで自然消滅する。「五分間舞台で何事も起こらないと退屈する」アメリカ人にとってはヨ

ヨーロッパのカバレット文化は異質のものであり、また、ナチスドイツを皮肉るエーリカの台本のパロディが、当時ヨーロッパの現状を詳しくは知らなかった大多数のアメリカ人には（それはドイツ人トーマス・マン自身の場合を見てもやむをえないことであるが）よく理解されなかったことが、キャバレー「ペッパーミル」が失敗した理由にあげられている。それと同時に、プレヒトの『肝っ玉おっ母』などの当たり役でドイツでは大評判をとるさしもの名女優テレゼ・ギーゼでさえもが、英語訳⁴²⁾の台本では彼女の本領を発揮することができなかつたのである。

「胡椒挽き」一座の解散後、エーリカはアメリカ各地でハードスケジュールの講演ををこなし、また著作や戦時中はBBCのラジオ放送を通してナチスドイツの現実を世界に訴え続ける。それとともにアメリカで、亡命先で悲惨な生活を送るドイツ作家達の援助活動も行う。もちろんその際彼女は父親の権威を最大限利用する。そして、このエーリカの努力は、彼女に一年半遅れ1938年同じくアメリカに渡った父親トーマス・マン本人により強力な後押しを得ることになるのである。

注

- 1) [An Eduard Korrodi] Thomas Mann: An die gesittete Welt. Politische Schriften und Reden im Exil. In: Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurter Ausgabe, hrsg. v. P. de Mendelssohn. Frankfurt a. M. 1986, S. 146ff.
- 2) Ebd., S. 162.
- 3) Rolf von Hoerschelsmann 宛. メンデルスゾーンより引用.
Peter de Mendelssohn: Der Zauberer. (Bd.II) Das Leben des deutschen Schriftstellers Thomas Mann. Jahre der Schwebel: 1919 und 1933. Nachgelassene Kapitel, hrsg. v. Albert von Schirnding. Frankfurt a. M. 1992, S. 109.
- 4) P. de Mendelssohn: Der Zauberer Bd.II, S. 119. ただしエーリカ自身によれば、議事堂放火事件を聞いたときにはミュンヘンにいて、後のオシエツキー、ミューザームら友人達の大量逮捕で、自分も身の危険を感じてドイツを脱出したのだという。Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-1950, hrsg. v. Anna Zanco Prestel, München 1988, S. 30.

- 5) Erika und Klaus Mann: *Escape to Life. Deutsche Kultur im Exil. Die deutsche Originalausgabe*, hrsg. v. Heribert Hoven, Hamburg 1996, S. 18.
- 6) P. de Mendelssohn: *Der Zauberer*. Bd. II, S. 131.
- 7) Irmela von der Lühe: Erika Mann. Eine Biographie, Darmstadt 1993, S. 80.
ただし、メンデルスゾーンも自分が編集したマンの日記の1933年3月15日の注釈で、このエーリカが持ち出した原稿について触れており、フォン・デア・リュエもこのメンデルスゾーンの自己矛盾を指摘している。(Ebd., S.296. Anmerkungen 54-56) マン自身も『ヨーゼフとその兄弟たち』についての講演の中でエーリカの「伝説」に言及しており、これによったフィッシャーの「トーマス・マン年譜」(Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer: *Thomas Mann. Eine Chronik*, Frankfurt a. M. 1980) も「ヨーゼフ」原稿の日付に関しては混乱しているようだ。(「1933年3月22日」および「4月初旬」の項参照) なお本論の概略のほとんどはこのリュエにより、トーマス・マンの伝記的事実については主として1933年に関してはメンデルスゾーンの上掲書、それ以降はハルプレヒト (Klaus Harpprecht: *Thomas Mann. Eine Biographie*. Bd. I, Rheinbek bei Hamburg 1996) および菊盛英夫『評伝トーマス・マン』(1977年, 筑摩書房) を参考にした。
- 8) Helga Keiser-Hayne: Erika Mann und ihr politisches Kabarett 《Die Pfaffenmühle》1933-1937. Texte, Bilder, Hintergründe. Reinbek bei Hamburg 1995. S. 65ff. なお、純粋なユダヤ人であった女優テレゼ・ギーゼは、ヒトラーの「お気に入り」の女優でもあり、ヒトラーは彼女の亡命だけは防ごうと試みている。
- 9) Erika Mann: *Briefe und Antworten 1922-50*, S. 41. ベーター・ズーアカンブは当時 S. フィッシャー社の文芸雑誌『新展望』編集者でもあった。
- 10) P. de Mendelssohn: *Der Zauberer* Bd. II, S. 183.
- 11) Ebd., S. 199.
- 12) これによりマンはシッケレ, デーブリー, S. ツヴァイクらとともに裏切り者として批判されることになるが、このいわゆる「ザムルング事件」については、菊盛氏の『評伝トーマス・マン』377頁以下に詳しい。
- 13) マンは当初、全巻そろっての出版を希望していたが、並行して準備されていたクノプフ書店のアメリカでの英訳版との関係で、各巻別々に出すことにした。なお、第二巻、第三巻はそれぞれ『若きヨーゼフ』(1934年ベルリン, S. フィッシャー書店) 『エジプトのヨーゼフ』(1936年ウィーン, ベルマン=フィッシャー書店) として単行本で出版。
- 14) 1934年8月16日付. Erika Mann: *Briefe und Antworten 1922-1950*, S. 50f.
- 15) 1935年4月20日付. Ebd., S. 66.
- 16) I. von der Lühe, S. 118.
- 17) メンデルスゾーンに拠れば、当時ベルリンにあったこの書店の「唯一の」所有者ザームエル・フィッシャーの存命中も、娘婿のゴットフリート・ベルマン=フィッシャーもたびたび会社をドイツから国外に移そうと試みていた。しかし義父の反対があってこの計画は実現せず、ベルマン自身このシレンマの中で苦しんで

いた。ザームエル・フィッシャーの死後(1934年10月15日)、ようやくゲッベルスから会社分割の合意をとりつけ、初めはロンドンのウィリアム・ハイネマン書店と共にスイスに新しい会社を作ろうと考えたが、スイス国内の反対にあい、結局、単独ウィーンにベルマン=フィッシャー書店を設立する。1938年のオーストリア併合後はストックホルム、ベルマン=フィッシャーのニューヨーク追放のち現在はフランクフルト。なお、ナチ政権下ベルリンに残ったS.フィッシャー書店を買取ったのは、ズーアカンプである。(P. de Mendelssohn: S. Fischer und sein verlag, Frankfurt a. M. 1970, S. 1322 ff. 及び菊盛英夫『評伝トーマス・マン』379頁以下を参照)戦後になってシュヴァルツシルトもこの件でフィッシャー書店に謝罪し、ニューヨークではベルマンと協力関係に入る。

- 18) 「新時評」紙のシュヴァルツシルトのベルマン=フィッシャー批判の記事、及び、これに続くトーマス・マンへのアピール、そして彼に反論したコローディの「新チューリッヒ新聞」の記事の原文は手に入らなかったため、メンデルスゾーン(Der Zauberer Bd.II/Thomas Mann: Tagebücher 1935-36, hrsg. v. P. de Mendelssohn, Frankfurt a. M. 1978) ハルブレヒト等から内容だけ引用した。
- 19) Thomas Mann: Tagebücher 1935-1936. S. 561f.
- 20) 彼女は、父親のベルマン=フィッシャーを弁護した文章が、少なくともパリで公表されることだけは防ごうと試みたようだ。(Harpprecht, S. 875)
- 21) 1936年1月19日付。Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-1950. S. 72.
- 22) Ebd., S. 73.
- 23) I. von der Lühe, S. 120.
- 24) Thomas Mann: Tagebücher 1935-36, S. 246.
- 25) Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-1950, S. 80.
- 26) Ebd., S. 83.
- 27) Ebd., S. 84f.
- 28) ヘルマン・ヘッセの側でも「新時評」および「パリ日刊新聞」に対しベルマン=フィッシャー擁護の論陣を張っていた。なおヘッセはウィーンにベルマン=フィッシャー書店ができた後も、ベルリンのS.フィッシャー書店で作品を出し続ける。
- 29) Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-1950, S. 87.
- 30) 1930年9月30日にチューリッヒでナチス批判を再開した「胡椒挽き」一座は、亡命後の第三プログラムでスイス国内の親ナチ組織の激しい妨害を受け、このスキャンダルにより事実上チューリッヒでの公演は禁止されるにいたった。この妨害工作を裏で画策していたのは、『集合』誌を援助していた娘アンネマリーのエーリカ、クラウスとつき合いを快く思わなかったシュヴァルツシルト一族であった。H. Keiser-Hayne., S.123ff. I. von der Lühe, S. 92ff. なおこのスイスでの第3回プログラムの中には、グリム童話に基づく「漁師(フィッシャー)の女房」(Des Fischers Frau) という、「王様」「法王」にまでなろうとする野心家の女を扱った出し物(Text in: H. Keiser-Hayne, S. 151ff.)があり、他のほとんどの演目同様エーリカが自分で台本を書いている。

- 31) Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-1950 S. 88f.
- 32) マンは1月14日、シュヴァルツシルトに対する『抗議』を書くと同時に、直接彼本人にも手紙（亡失）を出しており（Vgl. Thomas Mann: Tagebücher 1935-36, S. 240, S. 562）この25日のシュヴァルツシルトの記事はその手紙への回答にもなっていた。また、上に引用した1月19日の手紙の中では、エーリカはほとんどシュヴァルツシルトと交遊はなかったといっているが、しかし少なくとも彼のこの二回目の記事が出た時点では彼女はシュヴァルツシルトと連絡を取り合っている（Harpprecht, S. 876）、彼のこのアピールには、ひょっとしたらエーリカの関与があったことも考えられる。
- 33) Tomas Mann: Tagebücher 1935-36. S. 247.
- 34) Harpprecht, S. 883.
- 35) Klaus Mann: Briefe und Antworten 1922-49, hrsg. v. Martin Gregor-Dellin, Reinbek bei Hamburg 1991, S. 713.
- 36) Ebd., S. 243.
- 37) Thomas Mann: Tagebücher 1935-1936, S. 249.
- 38) Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-1950, S. 90.
- 39) Ebd.
- 40) 小塩節『トーマス・マンとドイツの時代』（1992年、中公新書）151頁以下。
- 41) I. von der Lühe, S.107. アメリカ公演以降の「胡椒挽き」とエーリカの活動についてはI. von der Lühe, S.126ff. H. Keiser-Hayne, S. 184ff. を参照。
- 42) エーリカ・マンはドイツ国籍を剥奪される直前、スイスで「胡椒挽き」公演を続けるため、アムステルダムで知り合ったイギリスの作家クリストファー・イシヤウツの紹介で、当日まで一度も会ったことのなかった詩人 W. H. オーデンとの書類上の結婚により1934年イギリス国籍を得ている。そしてアメリカ公演のための台本の英訳にはこの「夫」オーデンの協力があった。なお、エーリカは戦争末期従軍レポーターとしてヨーロッパに戻り、敗戦直後のドイツから母カーチャに宛てた手紙の中で、ニュルンベルク裁判中のゲーリング、パーベン、ローゼンベルク、シュトライヒャーらのナチス幹部が収監されていたホテルを訪ね「自分が誰であるか」を伝え彼らをパニックに陥れたことを愉快そうに語っているが（Erika Mann: Briefe und Antworten 1922-50, S. 206f.）、その時の彼女の資格もイギリス軍兵士である。